

298
5
844

明信奇訪 抱腹奇談

孫靜先生校閱
晴東柳志生書



數年

○奇談叙

№649

抱腹奇談一昨夜御送附相成り今日校閲仕り候間乃ち御返

候不相替新奇の御趣好最も面白く存候本書題して抱

腹奇談と申候ゆへ其題號とのみ見るときは只た人の頗を解

しめ徒らに抱腹せしむるに過ぎざる者と速了仕り候へど

も逐次玩味いたし候得ば大に世を諷し候真味文外に溢れ一

讀感歎の情を發し可申候就中坊子が世利に趨りて道德を壞

りたる段の如きは卷中第一の上出來にて次に金満家の心中

を寫出せし文章最も妙を覺候次には放蕩息子、實母との問答

自ら親子の情を含み且つ其言語の端々何となく實際を見る

の心地仕り候、小生輩の戯述の及ぶ所に無之候、只文中二三件

二の如き動不動言の冗長に渉るもの有之候是の病は早晚御全
快可相成兎に角に世益の一端たる事相違無之と存じまへら
せ候拜具

菊亭静

右は菊亭先生の著者に贈る所にして文中本書の評に係る
者あるを以て此に掲て叙文に換ふる而已讀者諒焉

晴亭柳窓

明治新話 抱腹奇談目次

- 一坊主 開化を氣取る坊主の文盲
- 一擊劍 流行に浮れて若者の擊劍
- 一吝嗇 爪で火を燼す金満家の脚算用
- 一放蕩 迷ひ込だる放蕩者の熱心
- 一免職 お諭を喰た官員の瘡我慢
- 一車夫 先きの見へぬ車夫の歎息
- 一舊弊 意氣相投ぜし老人の舊幕自慢
- 一博識 萬藝を知て一藝に達せぬ人物

明治新話 抱腹奇談 目次終

新話 抱腹奇談

菊亭 晴亭 柳窓 戲述

○坊主 開化を氣取る坊主の文盲

本堂の椽に乾したる小兒の襦布は未だ乾がざれども出入の肴屋は既に夕揚りの松魚を擔ぎ込で
 庫裏には刺身を造る用意あり住職の袈裟は衣架にぶら下りて表に僧態を示せど女房の帯其傍に
 横たはりしを如何せん後家寺参りに來れば女房頗る嫉妬を起して坊主の應對懇ろに過たりと罵
 る女の多き説教場には坊主故らに容態を賣りて氣取るあり末世の佛法己に腐敗して用ゆる所な
 りと雖も坊主猶ほ飯の種と飲代とを失はず酒を般若湯と稱し章魚を天蓋と名けし時代を愚なり
 と誹り鱧節を色文と一鱧を躍兒と言いは未開の者なりと笑ひ己れば文明開化の坊主と思ひ誤り
 今日も女房を相手に一杯飲ながら例の自慢話にお梅やコレお梅や一寸戸棚にある精進物を出し
 て呉んなイヤ毎度も言事だが世間では未だ精進物を出すから可笑ア昨夜も法事へいつた所が亭
 主は流石にけて開魚を出しさうな氣色サ所が婆アめが方丈さまは何魚をあがるものか飛た事を
 ト言てさうく精進づくめで酒を出したやつサそれはい、サ愚僧は精進でない方がよろしいと
 も言惡いから終味もない油揚や焼豆腐で往生して歸つたが實に未だ開けぬい奴が多いには困る
 五 其はさうと前夜の謝儀イヤサ布施はいくら有たへ己は何でも一圓だろと思つたが二圓札ン

六

やアあるめへ何二圓だト其ア豪成味かつた此の中で湯衣を買て呉とよ〜一圓と思たやつが
 二圓なら湯衣一枚承知〜ヨット今一本懸玉〜今日の刺身は素的に生がい、一圓の所二圓と相
 成た所で今一本飲サヲ、ろりか何附届け許りだ、とれ〜本堂へいつて過半帳を持て来いサイ
 と来た日本橋だつけ通町の昔の過夫帳は附込だから索引に而倒だ區分けが町で分けて置はい
 、何々嘉永三年辛亥六月廿六日香倒院卒中信士享年四十五歳俗名大酒屋飲十兵衛是だ〜辛亥
 では三十五年の回忌だヲいお使の衆承知〜ま〜たと言つ、小さい聲でお梅お布施はいくらだナ
 ニ五十錢だ些ト中位だがよ〜一章ね經を讀でやれば濟むとだドレ一ツやらかす〜いかト衣
 梁に掛て在た衣を取て一寸引かけ魚を喰た儘で其上酒の香のブン〜くするにも一向頓着せず本
 堂へやつて行て先ヅガアン〜〜と鳴〜本尊の前に坐りて經を讀んとするとき這はいかに木
 像なり〜如來は俄に手を伸〜て面にか〜り〜蜘蛛網を取り自ら肩に積り〜塵を拂ひつ、汝ち生臭
 坊主驚くとなかれト一聲發〜ければ坊主大に仰天〜ハット平伏〜たる儘頭も上らざる所に如來
 カラ〜と打笑ひ其方近ごろいよ〜心得違の廉之れあるに付今日は幸ひ暇の様子故申聞る事
 なり一体坊主どもの不所存は獨り其方のみにあらず近頃聞する所の坊主共多くは不埒至極の
 者ども而已なれと差掛り先づ其方の身分に付て申聞す可〜其方先年大黒と稱〜て女を引込み
 とあり〜が間もなく表向の女房と〜二人の娘を産せたる儀に付申聞すたり一休肉食妻帯〜由

七

事は誰の了簡にて致せ〜事なるぞ其方如きに必ず六根清淨なれと申譯には無〜之無量義經に
 せ〜五蘊六入の教も實は其方等に於て心得ある可き事なれと斯る深意は馬の耳に念佛とやら申
 聞ても益なれば先づ申まじ此事は申さずとも其方自ら女房を持ち魚を喰ふ以上は自ら心得
 くては相成らぬ事なるが何たる了簡にて肉食妻帯いた〜たるぞ政府より許されたる故と申か
 〜其の了簡が大なる心得違なるぞ政治と教法とは丸で別物にて有る事を知らぬか政治は形体
 を支配する者にて教法は無形の心を支配するものなれば教法の事は政府で何と申ても一向功能
 はなきものなり良〜や政府で彼是申たりとも教法上のは他の干渉を受て兎や角す可きもの
 は非ず況〜て肉食妻帯の事は政府より斯〜せよと申立たるにとあらで自今肉食妻帯勝手たる可
 〜と申せ〜なり早く言ば從來僧侶にて女犯の事あれば破戒の僧とて寺を追拂はれたるとなれ
 是よりは勝手次第にせよ女が持たい者は持可〜魚が喰たきものは喰もよ〜と云ふ主意にて只た
 禁するとはせぬぞトあり〜なり然るに此の勝手次第たる可〜と云ふ言達のあるや恰も百日も飯を
 喰ぬものが俄に振舞にでも呼れ玄如く其方等争ふて女を搜〜互に後る、を恐れて女房を持ち又
 た隠〜置たる大黒などを公然と女房に〜たるは何たる醜体ぞや是は妻を持可〜と命じたるには
 非ず若〜命ぜられたり逆〜て宗旨にて持ことを許さぬ上は決して持可きにあらざるを其方等最も得
 意にて喜び居る故に西洋人などには甚た嘲弄せらる、事なり其而已には非ず坊主の身にて揚弓

場をひやか一又は藝妓などを買ふ者あり常には世の風潮に動され利益を得んとする心を以ていろくの事ども企て及ぶ者も少なからず今日の坊主は俗と相近き事甚だしく其上人に坊主と思はるゝを耻て頭の毛を少く長く一糸が栗頭で羽織などを着て西洋傘を携へたるも多し説教所に於ても其方等は教理を説く事をせで落語をなす馬鹿ものあり坊主で有ながら神道にまざらばしき事を吐く者もあり三條の教則の主意を取違ひたるなる可れど必竟無學文盲のいたす所大乘小乗の區別も知らぬ馬鹿坊主後家でもだますか檀家でもせぶりて酒でも飲ん事を専一と心得たる不埒者なればなり見よ見よ其方等は西洋より入りたる耶穌教を邪教の異端のと惡口ながら耶穌教の追々に殖るを見て之と競はんとする元氣もなく只夢暗と排撃せん事を欲し理も非も頓着せず罵るのみなるは何等の無分別ぞ坊主の中にて洋學でもなす耶穌の教典をも涉獵して然る上に教理を争ふ程の人物ならば喜ばしき事なれど坊主の中に斯る人物は十人とは有まじ皆を新約全書位を一寸見た計りで皮相の排撃をなさんとするに過す西洋人には却て佛教を學び其方等より博識の者多くあるぞや教法上に於て不信切なる事斯の如くいかんぞ佛法の弘まる事を望む可きや且つ其方等は卑屈の根性失せやらす常に政府の命を怖れ教祖の教よりも難し有思ふはにかざる所存なるや明治五年の十一月僧侶の托鉢を禁せられたる時より今日まで托鉢はいたさず有ながら一昨年托鉢の禁を解れるや否や忽ち例の乞食根生を出し圓で葺菌の行列と言ふ體

往來を流して歩き戸毎に錢を貰ひ廻るは何事ぞや此の事を強らにあり、と言ふに非ず政府で禁ずれば止み解けば出掛る何事も形以上の支配に左右せらるゝ事の醜きを言ふなり然して其方等近來總て世の中の有様に化せられ俗人と交り結び利益のある事業などなさんとする心掛も有る様子なるが出家の身には以の外の事なり何事も法師と言ふは西洋より來て居る傳教師などの如く又は古への徳高き法師の如く世の利益世界を放れ道徳一方の心掛でなくば弘教は時ほざるなり然るに何ぞや寺の樹木はいろくの名義を以て伐り拂ひて己が利欲と一本堂寄進を號して勸化したる金にて公債證書を買ひ朝夕に酒肉を食ひ女を抱きあまつさへ後家を欺いて賸餘金を巻き上んと欲するなど重々以て不埒至極其方如きは目下に入寒八熱の地獄に陥る事疑ふ可らず猶ほ申聞る事めれども最早口も勞れたれば他日の事とせんト宣へつゝカラくくと笑ひ玉ふかど見れば早や本堂の障子に月影さして隣り寺にて八時を報ずる鐘ゴウーン漸く人心地に歸りて傍りを見れば女房の朧梅があなた夢でも御覽なさいまゝ一たか

○擊劍 流行に浮れた若者の擊劍

お面お小手參つたくお突いどつこい當流には突は御坐らぬお胴へ參へりやうたどつこい然らばいけませぬ先生今一本願いませうサアお持ちなせしヲイと來たハアどつこいお小手とぞなんの其様事では人は斬れませぬイヤホア一本お胴へお見事く中々御上達で五坐りませすと此は

つくか知らねども近來の流行につれたる劔術の稽古場日々數十の門弟詰掛け其の試合もすさまじき迄勇ましく折しも入來るは近隣に住む老人宮本先生とて昔は徳川の旗本北辰一刀流と東軍流の奥儀を極め兵學も佐久間流を極め一時は千乘周作の門人中十弟子の其一人なりヲ、諸君御精が出ますな小林氏の構ひ中々よくなりまゝ然し右の脇が餘り張過るやうだ中山氏はよく上段に取りたがるが未だく上段は損で有ふ矢張りセイ眼に付た方がよろしい些と腰がふら付やうだ最も体を定めるがよい昔と違て今の稽古は樂なやうに見ゆるヲツト其の面を打たのはよくない太刀だどうも太刀を逆に取て打からいけませぬ眞劔で有ふものなら今の太刀では逆も切れますまい万一横に拂はれたなら刀を振落されて飛だ事が出來ます何でも人を打よりは打れぬ要心が第一で有る己を空虚にして敵を打は兵家でも思ひ所であるト稽古を見ながら講釋をして居たるが早や十二時となりて皆々晝休みとなれば老人例の如く話を初める一体今の若い人々の劔術を學ばるゝは如何なる了簡であるやらん愚拙などには一向分らぬ事なれど概た健康上の注意であらふ定めて運動のため二ツには筋骨を堅ふする心掛と相見ゆるが最も然る可き事と存する然し運動のため而已ならば強ち劔術に限る譯でもあるまじ弓は胸と腹とより氣合をこめて五体を定め右手左手を伸して頗る胸を開き至極よき者にて是ハ敵手なく一人で出來る藝故甚だ樂みでよい槍も又た運動には最も妙にて殊にシゴキなどは一人にても出來て躰の爲によし柔術棒居合長刀いづれも運動にはよし強ちに劔のみには限らねど然るを今時弓を射る者もなく又た槍を振舞ふ長刀を以て拂ひ立るも何とやら迂遠らくも思はるゝ乎柔術も格をのみ取りては表裏ともに角力の雛形を見する様なものぢやが淺山流などや眞揚流などの試合を専らとして絞里競をするも些と面白くない譯なる可し所が劔術を心得て居れば獨り運動の爲のみならず第一身の要心なり強盜などの入りたる時や途中山道などにて不意に賊に逢ひたる時の心構ひどもなりて殊の外に有益の者なれば底で學ばるゝで有ふシテ見れば運動よりは身のたしなみと云ふ點に心付れての稽古と相見ゆるなり扱て武道の事に於ても拙者も國許に罷在る頃は一通り相學び太刀ぬく業敵をふせぐ術など少々は心得あれど兎角生物識りの若者は却て身に害のある者なり先つ柔術を稽古して表の格を二三十本を心得れば早や人を捕て投て見たき心持となり朋友など話をするにも第一に柔術の自慢と云ふだ君と僕と一組打やらかして見やうか杯と言つゝ不意に起て取て伏せたき心地出來るものなり其而已ならず往來を歩きても何となく氣許り強くなりて往來の絶へたる所などにて誰なり投て見たい杯と云ふ不了簡を生し却て先方が名人にて已れは手もなく投付らるゝ、なんど大なる不覺を取るものなり劔術も其の如く初め形を覺え其後三四ヶ月も學べば先つ素人と試合しても必ず勝つものあり素人は第一面を冠りて先が見へぬものなれば三四ヶ月も學だ者には手もなく叩かれるに相違なくすると早や自分は先生に成た心持にて

十

二十

早く泥棒め這入れかゝ吾れ一刀に斬て捨て手並の程を見せて呉んステツキの中には真劍を仕込
 み置されば急場の間には逢難いなどとて大平無事の今日に早や敵軍でも亂入に及ばん様に心得
 るものなり是を生兵法大疵の基とて以の外の儀なり敵と戦ふに劔術も専要なれど第一は膽力
 なり大坂夏の陣に鴨野口を守りたる隊長穴澤頼母と言は長刀の名人にて秀頼の指南をも勤め
 時天下に並びなき達人なれども戦場の働は偏に膽力にあれば強ちに藝のみを以て勝つ事とは定
 め難いされば穴澤程の上手も上杉方の坂田采女と言者どわたり合ふが采女は左程の上手とも名
 人とも言ほどの士にはあらねど謙信以來戦ひの場に於て膽を練りたれば度胸定りて難なく穴澤
 が長刀を拂ひ落し組で首を取りたり近頃櫻田にて水戸の浪士井伊大老を討取りまときの物語に
 付ても亦た膽力の藝にまさる事は知れて居るなり十七八人にて井伊侯が數百の行列へ切込み日
 下部三郎右衛門初め即坐に五人を斬捨て深手を負せたるもの櫻井伊三郎初め二十余人然れども
 浪士の中にて戦死は稻田重藏と云老人一人のみにて外は深手淺手を負ふ者七八人なり浪士の
 中齋藤監物佐野竹之助黒澤忠三郎杉山彌一郎森五六郎等は何れも劔術の達人なれども却て深手
 を負て間もなく一兩日中に死去せり中に大關和七郎蓮田市五郎森山繁之介などは劔術とて碌に
 出來たるにもあらず其身分とても同心手代など言ふ輕き者にて十六七才より役所の見習となり
 此とき廿二三又は廿四五なれば武術は學とすと申てもよけれど何も膽方の大なるより櫻田にて

十

は目つきも動きもありて多く敵を斬りたれど手疵は少々なり當今も存命にて水戸に居る海冬吹
 之助は櫻田の一人なるが其場の様子を承はるに何でも膽力ある者の戦ふを見るに頻りにお面お
 小手などと聲を掛け又ハメたなどと呼わり甚た威勢よしいかに藝が出來ても膽の小さきものは
 何分見苦い体にてマゴくする故多く疵を蒙たり佐野が一番に元氣がよくて目覺しかりし總
 て藝よりは膽力が緊要なりさて各々方が劔術を學ぶに一ツ心得可きとあり兎角に少々覺ゆれば
 危きに近寄りたがる者なるが是ぞ不覺を取るの基ひなり昔上泉伊勢守の弟子に塚原卜傳とて
 當時比類なき劔道の達人あり卜傳が家に一の太刀の秘傳とて世に珍らしき秘法なりしが門弟の
 中誰なり術の達せし者に傳へんと思ふ所に高弟の某は最も早業の達者にて數年の丹精現れたれ
 ば此者にこそ一の太刀の秘訣をば傳へんと思ひ卜傳が知己の人々も亦彼ならでは此師傳を受
 るとは得せじと評しあり或時殊の外に跳る馬ありしが卜傳が知己の者の門に繋ぎ置たり其時高
 弟の某は何心なく馬の後を通りければ忽ち跡足を揚て蹴たりしを高弟はひらりと飛退きて身に
 當らず之を見たる人々あわれ早業かな流石は塚原の高弟なり彼人こり一の太刀の秘傳を受るも
 耻しからじと口々に讚賞し其後卜傳に逢て高弟某の早業實に目を驚し候前日跳馬の後を通られ
 三ける時云々の振舞ありとて語りければ卜傳とては未だ一の太刀は授け難いとされける語りし
 人々大に不審り五六人相會して密に言けるは塚原氏の口上心得難き事なり彼の高弟の早業こり

世に煩ひなき事なるに塚原氏之を聞て一の太刀の秘傳授け難しとは何ぞ思ふに塚原氏己か及ばざるを知て忌憚らる。ならん塚原氏の早業一見せることよからんとて例の跳馬を狭き所に繋て下傳を招き人々陰に隠れて見て居たりト傳馬の近所に到りて尻の方へは寄らず三四間遠くを廻りて通りければ人々案に相違し扱て下傳に向て其子細を向ふに笑て曰く馬は跳るものと知らざればこり怪我あやまちも出来るなれ門弟が尻の傍を通りて跳られしは不覺とや申さん馬は跳るものと知らば近寄らぬが良きなり兵法にても斯る事は心得ある可き儀なりされば是等の心得なきものに一の太刀の秘傳は授け難しと申したるなりと答へけるとぞ各々方とても少許り劍術を學びてよなき勇氣を出しなば矢張り生疵の本なる可し劍道の要意は第一に身の衛りとなし第二には害を防ぐの要となし次に敵を打つためなれど先つ身身の衛りと心得なる丈用ひざる様にするがよし其の中にも巡查兵士などは職掌なれば格別各々方は素人の身として出精せらるも左までの益も覺ず其の勉強時間を半ば減じて學問に出精致されなば幾許の益になるやも知れず項羽は劍は一人の敵學ぶに足らずとて萬人を敵とする兵學を修めたりと聞く只今各々方が學ばる、劍術も身を衛ると運動の爲とに過じ其れよりは何事に就ても必用なる學問をも出精せらる、がよからん愚拙武術に及では左まで人に後れを取らざれども學問をせざるが故に今日の世の中に無用物視せられて武藝の思いの外役に立ぬを悲めり今の若さで余りケ様な事にのみ

出精せらる、も些と實にくい儀で五...
のみゴウくたり

○吝嗇

爪で火を燈す金満家の胸算用

ヤレく當月も最ふ二十八日と成たが晦日に這入る元金は烏金屋雁兵衛が五十圓と此利息が躍りと合て六圓八十錢じや底で元彼の五十圓を彼所へ廻す事とすれば遊ばせず済むイヤ其れく麴町の口も先日利息を入れなかつた彼人は時々滞るが心配な事だわい其はさうと已も二十の代から丹精して漸く一萬圓と云ふ高に成たが當年は是非一萬三千圓と云ふ高にて見なければ面目くないとれく公債證書のお顔でも拜見しやうかハテ何時見ても金貨と言ふやつは悪くないものだ桐の箱に二重に入れて置ば羽毛が生たとて飛出す苦勞はなすと公債證書どれ一枚二枚三枚四枚五枚六枚七枚八枚トハテな九枚有た筈だガドレく紛失では有まいコレく眼鏡を以て来い早く持て来いドレ一枚二枚三枚四枚五枚六枚七枚八枚九枚ヤレく安心く以上合て三千五百圓と底で貸付金が二千八百圓と金貨が千五百圓と銀貨が八百圓屋敷が三ヶ所ア、段々殖て来るが屋敷の方も今少く地代を揚てやりたい者だ表通り一坪十錢では安い十三錢と一やうハイヤ十五錢と一も宜ろう若く家屋を毀して外へ移るなぞト言れた日にやア厄介だの四方やそんな事も言まいか何にしろソロく直上げと出掛ねば面白くない然し今の地借めら權利だ

六十 〇の義務のと抜いて悪く捨た事を言たがるさうだから地代が高の不相當のと抜いて騒ぎ立られた六日には面倒だナニぐづぐ言た所が地主の權で頭から押へ付て仕舞ふ迄の事サ其にても金利の高いのは何より喜ばしい譯サナニく横濱から利子を持って来たトフム受取て遣ッせい何か進物でも持て来られたカナ何も持て来ねいと其は不行届を事だ少一小言でも言てやるがい、來月から利息は二十五日に持て来いとさう言がい、氣の利ぬ男だア、忘れたれ客やコレ今月の小遣帳を見せさッせいドレ是は米代か先月よりは米が多く入たやうだナニ晝飯を出した客があると思様義利だては止にさッせい晝時分に來たとッて丁度く飯を出す家が何所に有るものか此の不景氣の世の中に義利も糸瓜を入たものではない然て魚は月三度と極た筈だが今月は五十錢とある五度買たと見へるナニ下谷の先生が御座つたとき取たト是はしたり己が客の前で魚を取れと言ても手前が氣を利せて今日はシケで何も五座りませんとか何とか味く調子を合せて呉なくてはいけぬではないか瓜揉位で澤山だわそくてマツチなども一ヶ月に三ッとは多過る座つてもれば山となると言譬もある三ッで二錢五厘か三錢でも一年には三十六錢十年には三圓六十錢となる氣を付さッせい洋燈も宵の内は二ッ付るもい、が九時になつたら一つにして寝るときは消がい、一ヶ月に入合つ、消費ては溜るものではない家内五人では十二圓位であげたいものだが十五圓つ、も掛ては堂も困る少一氣を付さッせいト口から泡を吹て小言を言ところへ學校から歸て來た子供がお父さんお前いつも小遣が入り過るくと云が金は世間の流通ものでいくら遣てもよいじやア有りまんかお父さんがいくらお金を溜ても死んでいく時は六文きや持ていさますまい生て居る中味の物を喰て樂みな思ひをして金は澤山遣さずとも私等にはお金を掛て學問をさせて呉れ、ば却て私等の爲に成りまするお金や家屋敷は有形の財産と言ますすけれど其れ丈の限りがありまするが學問と才識は無形の財産と言て限りがありまする一萬圓の働もする一五千圓の働もいたします爪の先で火を燈す様な苦しみをしてお金を蓄なさるよりは余り無理な事をせず少一宛なりとも金を拵ひ貧窮の者や病氣災難で困る者などには施しておやりなさるが宜ふ御座いませう家の身上では一ヶ月に百五六十圓の利息は這入りませうから月に五六十圓の暮しをなす一休の樂をなさる方が能がと思はれます世間ではお父さんのとを頑固だの吝嗇だのと申まするナニ頑固だと此の餓鬼め學校へ出やがつてからチヨセコセくと饒舌りやがる已わるく口才ばかり振りやがると是から學校へ出さぬぞソレだから頑固だと言ふので有ますナンだと此の野郎ア、今の小供は親を馬鹿にやアがる

〇放蕩

迷ひ込だる放蕩者の熱心

七十 ハテお母さん其様に小言を言なるともねい親の物ア子の物子の物ア親の物サ親父が蓄た金を子が遣ふに何も不思議は有ますめへ今に親父が死ば釜の下の灰まで僕がもの其時にこそ自由の

權よ親父がグズグズ言たらお母さんが傍から何とか取成す可いサお前までが親父に左祖して放蕩だのなまけたのとお阿り頂戴では實に立瀬がないわいなアト言ふ主義だぜ僕達で友達の交際もある一ヶ月に十度や十五度吉原へいつたつて左程金も遣ふめへ芝居だつて月に三度や四度観たつて甚だ多しと思はない譯其れに度々お小言では痛み入る子ナニ酔て饒舌るト是はたりお母いつ酒を飲せなすつたへ憚りながらサ由良の助も言つた飲だ酒なら酔ずばなるめへが子お母さん飲せぬ酒に酔たものは有ませんぜ憚りながら此酒は吾輩が自ら召上た酒で母じや人の賜物にあらずサ狂言ならお下に五座つて一ト通りお聞下ださーれと言ふ所だが先づ聞玉へ前夜姉の所へいきや一た所が姉がサ姉子が云ふにわお前も廿五になつて何時までぶらぶらして歩くのだ兄さんも心配して余り放蕩やら懲治監入りと言て監獄へ願を出して獄へ入れて懲りて貰ふとサお母さん何と洒落臭い事を抜すじやアごせいせんか何ぼ姉が官員の女房に成たとして其様に亭主風を吹せて兄さんくと抜す事もねへ姉の亭主だつてどれ程強いのか今免職でも喰つた日にやア木から墮た猿のやうにマゴゴゴして己の家へ来て救て呉ると言ふに違ひないよ女風情の分限て僕に向て意見を言ふだけ可笑のサエお母さんお前も兄さんくと言て賛成の組だが官員なごア憫然なものサ碌々朝寝も出来ずに七時とか八時とかには靴杯をばいて出掛やすまシカ此の炎熱時分に土蔵見たやうな構中もよろしくと言ふ白壁の中で何を書くのだから一日参階に

コツくやらか午後二時か三時とかに成て漸く歸りやす歸たとして寢酒一杯飲位が此上のぬい樂みで毎日く替りのぬい女房の顔を見て嬉しがつて居る其もよーサ偶々つき合て酒をのむサ其時だつて上役の者にやア頭が上らず胡座かいて手を叩ながら酒を飲む事も出来ぬいと云ふあはれな話よ底へ行ちやア僕などは自由なものサ親父の前でこそ小言ををわれ何の蚊のと六ツかーい何所へ行ても憚りながら大モテよ藝者でも幫間でも僕の顔を見た日にやア一町も先から土下座アして御前くと言もーぬいが若旦那くで其のもてな一大方ならずナント耐へられた者ではないテお母さん何も泣く事は有めいへん女程意苦地のぬいものは無いぜ愉快な話を聞て泣くとは何と一た事だ舊弊の人物は是だから困るコレお前はよくも其様な自分勝手な言れた者お前が遣ふ錢は誰が儲たとお思ひだ親父どのの寝る目もねずに働てお金をためるのも皆な子供に譲りたい許り其も少つ、も余計に譲たら仲間もの者にも鼻が高いであるふ出来をこをつた子程可愛いもので朝から晩まで放蕩に身を持つづー親の金を手當り次第に遣ひ散す子供に猶此上に家も屋敷も譲ろうと言ふ親の心を難有とも思はずけ放題の泰半樂を言ふとは何と一た事ぞや夫婦して隊ぐのは皆なお前の爲めに金を儲けたい斗りいかに我儘氣ま、でも少い親の身をも察して手助けにはならずとも少い辛抱して家に居て呉る氣にはならぬか責て清元を習とか何を稽古するとか云ふ位の道楽なら底に了簡の付やうも有ければ一日一夜と家に居た事はなくホン

十二 拵て小供に譲るに世間並の通り文句一向に珍らしくも御座なく候サヘン憚ながら去りながらたが親と云ふ者は子の爲に働くが理の當然是ハ天下の御大法働くが思なら最初から子供を拵へぬが上分別何も思にきせて子供の爲に働くの皆んな誰が爲と思ふぞなんと仰せらるゝには迨ばぬ事サ其ハまずそれとして今日は改てお母さんにお願ありサ權太の申分じやアねハが今度ア實にお母に別れる様になるめへ者でもなト云ふ事件だがナンとお母さん僕が可愛いと思ふなら相談に乗て呉れめへカナンの毎度口先でい、加減のたま事計云ても然欺されて許りは居りませぬお母がさう言なら致方がねへから僕も肝胸を痛めて一走り飛出すか流石の死情でもせずば成ますめハナニ其様に驚く事もありませぬいどうせ欺言には乗ぬの何のと言なざる代りにやア子供は堂なつても頓着はないと言五了簡たろうマアお待を何の事か知らないが親の名でも出る様を事をされてはソ一底だからお母さん相談に乗ておくなせいト言や一たのサ外の事でも御坐りやせんが實に僕が馴染みの女の事で御座りやすフム其の女を女房にでもしたいと言のかハナニ僕が女房にしたいト言譯ではないが少一お恥けれど先では是非女房にならねば成ぬ若一女房にせぬならば一處に死でお呉れ其も出来ないなら何所へなと連て逃てト云やすの打捨て置くなら何様な事を惹起かも知れやせぬお母さんが承知して女房にして呉ればよ一若一其事が叶はぬ時は一處に死んでやらねば義理が立ちますめベソリヤア眞の事かハナニ嘘をい、ませう面白もない事をコレ能くお聞よお前もアよく一生れ損たものではないかエ、最ウ其意見は聞飽や一た釋迦が意見を一やうが孔子さまが小言を云はふが是計りは止られぬト云ふ所へ親類の佐治兵衛入來り委細の様子を篤と聞てヲ、其の願い易い一く女郎を女房にする人は世間にいくらも有る今の官員方は藝者を奥様に一て居なざるお前が女郎を引込む位の事は小言を云ふ丈の事はない萬事此の伯父が吞込みや一たが扱て女郎は相違なく引取てやるが此に少一已の云事を聞て貫はねばならぬ僕が願せへ叶て下さるならエ、サ万事吞込みや一た底で已が頼みと言は外でもねいが女房を持た迎夫婦の中が肝敷なくては家の爲でない男女の問は互に信實を本とせねば中よく暮すと言ふ事には行ぬものじや其信實の教を聞には耶蘇教の説教を聞がよい夫婦中をよくする爲じや是もお前の爲を思ふので有る何でも毎日毎晩耶蘇の説教を聴聞一凡そ五十度も聴たなら直に己が金を出して女郎を引取て遣るナンと少も早く聴て歩くがよい此の聴聞をせぬ中は決て女郎は受出してやらぬナンの説教を聞く位の事は屁の屁だそんなら今ツツから聴初め

十一 二て直に五十度聴やせうソナラ少も早くサツト合點ト出て行く佐治兵衛さんの御心切は難有ふ御座いますすが女郎の事も何分受出しましてはハテお母さんお案じなさん然云ては恐れ口だが御子息は悲い事に學問をせぬから女に迷ひ方も早い是が小學校程の學問でも有る日にはテの様

に放蕩はしますめい舊幕の時代に文盲人が多いから放蕩無頼の息子も多かつたが今の若い者は其れく學問もある上に第一獨立とか何とか云ふ志もある其で親に心配を掛る様も少ないのじや或先生の仰るに親の意見も他の教戒も用ひぬ者は教法の力を借りるより外はないと申ましたるが今日に成て學問一ろと云た所が聞入もしませず寺の説教で昔から聞慣て頭から笑て掛るから功験が少なり底へいつては耶蘇の教が一番よい今に御覽なせい説教を聞く中には自然己の非を悔つてア、今迄の不身持は全く自分の不埒から起たと云ふ事を知りやせうから少の間だ待てお出なさい後悔が出たなら外によい嫁と貰つておやりなさるが宜ふ御座いやすと云つ、歸り行く斯て十日斗り立て左治兵衛とうた説教を聞たか子へいお伯父さん僕と最ふ女を受出す事は止ませうソリやまたなせだへ女郎を受出す約束ではないか段々説教を聞まして神の恵ある事を考へますれば眞に勿体なくあります是から女郎買もよりに酒も飲ますまい僕は耶蘇教へ道入りまして信心を致す積りで五座りますア、其んなら善心に立歸て呉れたかハイ最も眞の人間に成ましたアモ耶蘇教は難有いものじやナア

○免職 お諭を喰た官員の瘡我慢

頂きたる黒の帽子は高くと雖も其鼻到て尻込み黒塗の車珠に輝くと雖も其顔色甚だ青く汨羅に遊びたる三閭太夫門前拂ひを喰たる盛衰記の梶原も斯くや有けんと思はれて心の中を哀れな

車の上で獨りつくくと考ひけるは吾れ長官のお宅へ度々行て權妻にも屢々進物を致したれば尤も昇進す可き筈なるに今日のお諭はハテ合點の由かぬ事なり四方や人違ひでは有る親展書とあるから何か御密談の次第でもあるかと思へば都合あるから辭表を出せとは難有ない御内諭然しどうしても人違ひかと思はれるがまさか人違ひでは五座らぬかと聞く譯にも行ず去りて翌日免を喰ふかと思へば耐らぬ譯だ此の車に乗て歩くも今日限り知らぬ事とは云ながら車夫めが威勢よく走るに付てもア、耐らぬく其はさうと權妻のお花もかゝる事の有ふとは知らず居るで有ふ月給があがつた日には權妻も抱ては置れぬ可愛お花めに暇はやりたくないが去り進一文も取らずには權妻も置れまいハテ困た事に成たアと太い呼吸をホツとつく折しも車は玄關の前に着ぬ免を喰ふ体を見せてと常々高を吐きたるに不似合なりと思はれんかトグツと氣を替て意氣揚々只今お歸りで五座いますか貴君お顔の色が平世の様で御座いません御氣分でも悪ふ御座いますかエナニ何とも無いコン早く酒を以て來いあなた先刻より鼻本四暗さんがお出で待つていらつやいますア然か此方へお通し申すがよいイヤ是は御主人先刻より御歸りの程奉待候サ別義でも之なく日外御周旋願ひたる一條なるが彼者頻りに小生方に參つて七等属なり八等属なり又は十等属にても宜き間何分至急に願たいとの事其に就きての事と申ではなけれど明日は是非御貴臨を願ひ新富座の新演劇を五覽に入たいとの熱心どうで將來は御厚

情を相受る事故御近づきの爲め權妻君も御同伴を願ふとの儀にて候いか午後より御散步歩々御出向になりては如何さて此程中よりお話申したる例の會社よりも是非に御招待申したいとの頼み又た此程に願書を差出せば御指令向の義何分可然御取なを願ひ奉るとの事にて今朝はわざと社長参りての頼み就て近頃有名の山田先生が揮毫したる油畫の額を一枚献上仕りたくとの事に候が何れ六七日の間には仕上る由是は餘程珍敷き名畫にて凡そ四尺も之れある趣き一際のお樂みで五座りやすと立續けて饒舌れど主人の胸中ムヤクして一向に面白からず翌日免職になるとは知らず新富座の油繪のと牡丹餅で煩べたを叩かれる様を味い話許りなれど是とて己が翌日免を喰たなら其れざりに成て仕舞で有ふ去とて免職の内幕を知られては外聞あり、イヤ毎度千万忝ない儀なるがマヅ一杯やりたまへイヤモウ今日は廳中にて大議論ありサ僕は平世議論は成りだけせぬ性なれど今日の如きは實に國家の爲にあらずと考いたから大に長官を論破し其の時は實に局内の者耳を傾けざるはなすサ苟も忠君愛國の精神を以て見るときは一身の進退などは願ふの邊がないテ是れ愛國者の本分なれば致方がない譯だが人も議論の爲に進退舉止を定むる様に成ては何時いかなる場合で民間に下るかも知れぬ島津左大臣や西郷氏などが朝鮮の一事に付て退きたる如き政治上の改革論行はれずして退きたるなど皆な英雄豪傑の高踏勇退とも稱す可き事にて僕なども亦然り今日の大激論をやらから大に同僚を説き伏せ進んで長官に

向て雄辨を逞ふ一サ本官の議にして若く採用なくんは本官は斷然職を辭するの外なしと明言したるが同僚も此の一言には驚きたる容子にて密に云には君に今辭されては本局の精神も柱石とも頼みたる人を失ふも同然長官にも局長にも一方ならず心配せらる、容子なれば議論の採用いかんは暫く措き是非に止り玉へ君の論は頗る高尚にして隙を容る、所はなれど目下行ひ難き事情もあれば切に思ひ止れなど、頻りに勧めたるが僕の氣質は君も知つての通り思出したるは飽迄徹さねば成ぬ性故たどひいか様に云とも僕の論にして行はれれば何の面目あつて朝に立んやと云放つて歸宅したる所なり男子も議論をして擧止を定める様に成ると彼此當り障りが出来るよ今の官吏は多く上の鼻息を窺ふて自分に説などを定める者は少ないよナニ僅に百圓や百五十の月給など民間に居ても取れる何是れと云ふ目的もないが僕などハ人と違て翻譯や著述をして一ヶ月に百圓位の仕事はするよ腕に覺のあればこそ長官も局長も恐る、に足らぬ譯サ殊に寄つたら翌日は辭表を出してやろうと思ふが何所ぞ君の知つてる會社か新聞社に知己はないか子當分の中少く手傳位をしてやつてもい、テ月給はいくらでも頼着はないが成る可くは多いに如ず君周旋し玉へ是非周旋し給へ、エ、エ、エでは解ぬテ實の話サ御戲言許り御辭職とは其アどうも解せませんテ何も今日一寸御議論をなすつた位で直ぐ明日辭表とお出かけなさつては早過るでは御座りやせんか如何な御論にもせよ長官だつて議論位の事で辭職をお聞届にも成

りますまい是が判任かお雇の御身分ではない苟も奏任の御地位で居せらるれば容易御進退もな
りますまいいふト存じますすイヤそれも無理な話だテ官途の事情は局外人には譯るものではない
吾輩だつて已れの説の行はれぬ所に浮架くくして居られるものか其所へ行ては男兒の腸がなく
ては世に立てても言甲斐なしと笑はる可一職を辭するにも諭を受けて辭表を出すなどと言ふ徒とは
違ひ議論の行はれぬ爲に退くのだから伏仰天地に愧ずサ是非何所ぞへ周旋一玉へ今話シのあつ
た油給などは入らぬが其社へ周旋一玉ひ翌日からでもい、随分勉強するぜ平世の親みは斯ゝる
時の事だぜ是非急に周旋一玉ひサテはお諭を「エ」ナニお頼みを受ましてもお當にと成ません

○車夫 先の見ぬ人力車の歎息

ア、ムニヤくく欠伸の仮聲なり今日もまたアブレだ晝寝一た方が勝らしいノウ勝公サウ
ヨバツちやアまだゲンコニーきやアならぬ昨日もバンドウよ其でも勝公なぞア車持てるから
強せいだが已等達ア羽代丈の働きも出来ぬと言ふのだから形な一よヤイ一信州味くやるな
ア眼鏡か明鏡橋へ行くかと云なりナニ日本橋だコウ熊公此節の不景氣に持ちこみ鐵道馬車が直
下をーやがッたから猶更苦しいのたぜ眞思いまーいのは鐵道馬車よ數万の人力挽を干乾一にす
る丁簡と見へるがいめいまーい奴等アじアぬいかノウ然うよ今に已等達の怨みでも碌な事アお
い夜でも石を降してやるべいか馬の向足擲き折てやるべい寧ろその事車をぶち毀すがいいそれも

尤の事だが近頃一体に不景氣の所へ馬車と云やつが出来て昨年の冬以來困て居る所へ今度の直
下と来たから實に立きもなく成たのだが是も馬車が出来た故だと思へば腹もたつが實は不景氣
のせいでも有ふ然し人力車に乗る客種は馬車に取られ今から取返す事も出来ぬ譯だか此ア何と
か工夫が付さうなものだ松平ア士族だと云から此位の譯合は知てるだらうお前も昔一は五千石
の殿様でも今日人力挽に成て見れば已等達の仲間だ何とか工夫を付て此の不景氣を取返す事に
やアいくめいかノウ金公違ひぬい松平何とか一工夫して見ぬへなコウく松平くくと云て呉る
な矢張り千公くと云て呉な、已だつて昔こそ智慧も分別も少一は有た様なもの、今此様身
分に成て見れば矢ッ張り人力挽よ工夫も何も出たものではないが前達か馬車を悪く云から實
に可笑くつて居たのサナンだつて可笑いのだマア少一ものを積つて見ても知たものだ今の世の
中は何でも珍らしい事なくては錢の儲からぬ事に極つて居る十年許り前に人力車が流行初め
た時を考て見ぬへ其時ア東京中の駕籠屋がいくら困たか知れや玄めへ其時駕籠かきの丁簡でハ
是は人力車めが出来たからの事だあの車屋めいめいまーい奴等だト怨ただけれど時と時節には勝
れないものでとうく人力車の世の中となり駕籠は葬式に用ゆる事と極た様なものだが是だッ
て人力車の咎ではない世の開くるに付て遠ものは段々人が嫌て来て少一でも手ッ取り早く
七十二 せにの出ぬい方に人氣が付のだから何程怨でも追付ぬ話よ其の証據には橋濱と新橋の間に鐵道

が出来ぬいうちは馬車と川蒸氣が味い錢を取たが一度鐵道が出来てから馬車も川蒸氣も上つた
 りで初めの程は小言も云て見たが矢張り駕籠屋が人力車を怨だと同じ事どうく便利で錢の
 安い方に勝をとられたのでも知れて居るだから今馬車を怨んだ迎初まらぬ話で却て已れが働きの
 妨げとなりグズグズして居る中に鼻の下が干上るなんでも智恵のある目の付やうの早い人間
 が勝をとる世の中だ鐵道馬車だつて今でこそ人力車を押倒して錢を儲けるやうな者の今五六年
 も立たなら又た何か新奇の物が出来て鐵道馬車を困らせるかも知れぬ何でもお前達は馬車を怨
 む事を止て馬車が一区内三錢なら此方は二錢でやり馬車が二錢なら一錢五厘と下げ飽まで安く
 して敷でこなすが第一だせ直段せへ安ければ當節は直に人氣が付て己等達の景氣を取直す様に
 なるめへ者でもないそんな所へも氣も付ず鐵道馬車が溢れる様に客を量つて持て行くを見なが
 らグズグズ言ふ許りで負ずにやらかす了箇のぬいのは實に意苦地なりの骨頂と言ふもの東洋の
 人間は忍耐心といふ者に乏しいとつて西洋人が笑ふが前達も笑はれる組だろ又た世の中が
 變化するに就て總ての者が改り新しい物而已行はれて舊物が廢る之を新陳代謝と言て智慧のある
 人間は其の代謝に目を附て時勢に後れぬ様にするから底で以て飯の種に困る様などはないお前
 達は素より無學文盲で世の移り代りも知らず物事はいつも停滯不動とのみ思つて居るから鐵道
 馬車が出来て今に人力車の不景氣に成を知らずグズグズして居て今日の困難に陥るなどいかに

も氣の利ぬ話よ最少早く心付たなら此の難澁はあるめい良しや難澁するにもせよ早く心付位
 の人物は何とか早く商賣換をするわサ已が今一寸計算をして見せる東京の人口がガツと百万と
 して此中で日々往來を歩くものを三十万人と假につもる此の三十万人の中人力車に乗る客が五
 万人として人力車の數が五万挺とすれば一挺で一人の客を乗る割合なれど此所へ鐵道馬車が出
 来て新橋から上野淺草と客を送る此の馬車一臺で一日平均拾圓取上るとすれば乗客一人四錢半
 均一臺の客二百五十人として馬車の數四十となれば乗客一万人なりさて人力車一挺で一人の客
 と當てたる所へ昨冬よりの追々不景氣殊是より農業のいそがきより田舎より出でずとすれば五
 万人の乗客一万人減じたりと見て其上に鐵道馬車に一人取られ又た馬車の直下けて客が増し
 たらば又候ろ二千人位は馬車に取られたる可し左すれば人力車に乗る客は二万七八千人と知る
 可し五万人の客を五万人の人力車で乗るときはどうか割合もなく成る可れど二万七八千の客を五
 万の人力車で争ふては今日の難澁にいたるとい珍しからぬと有ふナント口で斗り不景氣く
 と云ず勘定ずくめに目を注て一工夫するが宜てはないかノウ勝公ホンニ松平の云通りだ皆な
 二少一氣を換て人力の相場をグツと下るか左もなくば商賣換をする迄だ今急に商賣換も六か
 九直を安くして敷をこなすがよから違いいいト云ふ所向の方からヲイ若衆車を五挺頼む
 せへいれ安くめへりやせう

○舊弊 意氣相投せし老人の舊幕自慢

是はく頑兵衛さん能ごさつた麻布から此迄は餘程五坐らうにヤレくまづお上になされイヤもう人力車が夏蠅てく昔は往來に車と云ふ魔邪がないから互なども道を歩くに心配が五ざらぬが今の世の中は人力車だの馬車のと毛唐人が持込腐つて寔にハヤ見るもいめいまい事で五ざるサレバ何を申ても徳川様の御時節だテ御布告だとして今の様に四角な字をならべた事はない御家流の書で和かに書て下すつたものサレ前さんも覺て居なさるだらう大御所様が薨去に成た時よ彼の御葬式なんぞは唐にも天竺にもある者ではない然うく何を言ても昔の事だ正月の元日に大手御門の前の賑やかさ諸大名の御登城なんと思ひ出しても涙がこぼれる已も覺て居るが品川のお臺場が出来た時水戸様を初め諸大名の見分が有たがイヤ其の見事と言ふものは家々の旗馬印を立て數千艘の舟で沖へ乗出し所は恰で繪にかいた八島段の浦の合戦よ其れに將軍様の五本骨の扇の御馬印葵の御紋の白の御旗などが出たから關ヶ原以來の見物だとして人の出たともく常陸下總上野下野甲斐信濃まで聞傳へて見物に來たさうだ何でも徳川様の威勢はすばらしいもので有た長州御進發もまた大した者井伊掃部頭様が先陣次が藤堂和泉守様中にも井伊様の赤備とて赤い旗を立てられました將軍様は白に五輪の塔の御陣羽織であつたツけなんでも御先備が立てから二十日許りと云ふものは毎日く御練出しに成つたが何十万の御人數で有たか

今なぞいなんぼ徴兵が集ても彼程はあるめいとく日本中の兵隊だとして二万人か三万人よ徳川様は旗本衆許り八万騎で有た御家門御譜代まで數へたら三十万人も有て有た何と豪盛な事ではないか今の世の中は何も蚊も開化くと觸散し税の出る事斗り多いには困る酒の税だつてさうよ昔は千石造ても五十石造りましたと書上れば其て濟だものだ今では然はいらぬ烟草の税なぞは一向に話に聞た事もなかつたが今の世の中は十銭が物を賣に一銭の税を取れる商は一割口錢とて此上のない儲といたものだが一割お上へ取れては儲ける場所があるまい物事万事此通りだから不景氣くの聲が絶ない筈だ往來に立たランプだとしてホンに無益よ銘々が提灯を

持て歩たなら足元は明るい其上入費を取れる苦勞もない道路の普請だとして杖でもついて歩けば別に心配も入らぬ昔から往來が悪いとて躑て死だ者も聞ぬ煉化石だとして火事が出来ぬとも限らぬ第一地震の時は真先に厭に討れて死なねばならぬ兵隊には鐵砲を持せて靴を穿せてもスリと云ふ時は刀がなくて葉はぬ靴では働けぬ草鞋に限ると云ふでいらないか鐵道が出来た便利だくと云ても時々人を引殺して騒ぎをやらす劔術や茶の湯や生花なぞは無用の者だと蹴な

一十三 一付たもの、今では大に流行する今に此政治向も徳川の通りと云ふお仰が出ないものでもないお互なぞハ此通りチャンと髪を結て居るから何所へ出ても耻る事はない今時の人物は元服すると云ふ事もなく女は女房に成ても齒を染ぬから間男をしても取押へる証據がないと言ふものだ

何事も昔と違て氣に食ぬ許りナンとお互に氣が合はこそ斯打明た話も出来るが今の人物は氣
 狂染て居て話相手になりませぬいかにも舊平さんの仰る通りで五座ります私なども此年に成る
 迄支配人をして居ますが近年はヤレ戸數割だ營業稅だ雜種稅だといろくの名目で取立る數が
 多いから一々覺て居る譯にもゆかず其上何を紛失したソレお届書と言は二通も三通も入る上に
 書き様がよいとか悪いとか其面倒と來たら話になりませぬ店の内へ移轉者があればソレ戸籍を
 どうするのとは是もまた面倒の上警視廳東京府やら區役所やら呼出される事があるヤレ這たの
 轉だのと話にならぬ程面倒サ之を考て見ると何を言ても徳川様の時代だ私が家は御入國の節麴
 町の草創をした家筋で御能拜見にも出た者であつた麴町の太郎兵衛と言て誰知らぬ者もない舊
 家でも今の御時節では何にもならぬ開化くと云ても糞のやくにも立ぬ第一株と云ふ物があ廢
 だから困るのよ何より錢廻りのわるいには困る昔ハ札と云ふものがないから安心でよかつた
 か今では紙べらの通用であるから尙更不景氣に成る左様くとどうしても徳川の時代がよかつた
 ト二人で互に舊弊話の所へ憐りの小間物屋の亭主イヤ頑兵衛さん能くお出すつた子舊平さん
 御不沙汰いたしやうた相替らず徳川話にか子イヤお前さん方の舊幕自慢も久しいものサなんば
 自慢しても武士の斬捨を廢れたのと火事が少なくなつたの郵便の便利が開けたの往來で下座する
 心配がないの二日二晩で上方へもかれるの新聞紙を見られるの電信の便利を得たのとは明治

の御代の難有い譯で有ふとツちがい、と言つて昔時の様に少の間違ても手討だの傳馬町へ入
 るのと云ふ事のないのは何よりの事である第一に自由と云ふ事がない時節だから立ぬ自慢
 なすつてもだめだ今に國會でも出來て各々が政事向に立入る様に成ると言ふ目出た時節が來
 た日にやアなんば徳川くと云つて糞ほどの効能もなしサ舊幕自慢もい、加減になさるが
 い、自慢じややねいが昔は今の様に人間が薄情でない約束などを間違ふ者が少ないから裁判所
 も入らなかつた奉行所へ呼れて呵られ、ば其で事が極たものヨ今の人間と來たら口計り達者で
 油斷のならぬ奴計り多い是が第一氣に食ぬ次には稅が高いから氣に食ぬモツと安くして貰いて
 いものだハテ然云ても無理な事許り昔と今は米の直段から違て居る米が一升百文の所を今は十
 錢よるか昔の稅は年に二歩で濟だものなら今では二圓でなくては釣合ぬ此の道理を考て見たら
 小言も云れぬ譯ソなら人間もまた昔の人は安くして今の人は高いのかハテ云ずとも知れた事昔
 の人間は馬鹿で今の人間は利口よどうりて口許り達者だ

○博識 万藝を知て一藝に達せぬ人物

ハ、ア此は玉樂が山水の大幅中々能く出來て居ますナニ玉樂は永徳の弟子で有ふと誰か左様に
 申されまうたか或る新聞屋が申まうたト其は抱腹千萬其で五座るから當時の學者は役に立ませ
 ぬ一体狩野家でも玉樂が流と永徳が筆の跡とは最も違て居ります玉樂ハ古法眼と云れた元信

四十三

の弟子にして永徳ハ元信の三男松榮の子で五座る此の人一派を書き出されて右近探幽など下有
 名な人も出まゝ玉樂もまた此流より出て一派を立られ元龜天正の頃小田原の北條家に仕へて
 天下に聞た人で五座るから全く時代が違ひます全体狩野家には元祖元信以來名人も多ふ御座る
 が永徳が一派を立られた後ち探幽の弟尙信もまた一派を立られ其所で家が三ツに分れた様な者
 じやナニ繪の家と其だけかトどうしてノ第一古いのが土佐家元祖は土佐守經隆次が行光光重
 廣周光信光茂など云ふ外には東福寺の兆典子か書出された明兆派巨勢金岡派仁安の頃の鳥羽流
 明より渡つた秀文天龍寺の玉腕子然可翁雪舟雪村周徳英一蝶などおろくある其派を立た中に
 重立た人々のみにて斯の如く中々數ひ切れた者ではない其はハ、ア許六が筆成程是ハ面白い
 手紙らしいが眞物らしい許六は蕉門の十哲と云て俳諧の方では貴重される人よナニ誰の弟子だ
 ト今も云た通り蕉門の十哲とて芭蕉の門弟中で寶井其角嵐雪支考丈草許六去來野坡北枝杉風越
 人などと十人を十哲と云れた組サ皆な當時の名人である中にも其角は江戸風とて一流を起し杉
 風は正風を弘むるに力を盡した人物である後世此の流義の天下に廣まつたは全く十弟子の方だ
 已は江戸流とて其角の流を酌むが斯道にも入て見と淡林蕉風伊勢美濃などと流義はいろく
 ある其講釋を云初めた日には一朝一夕の事にあらずサ此の幅なども矢張り茶道向きであるど
 りて探幽守信の筆である此人は茶もよくせられて随分達人であつたそうナニ己は茶は餘り
 好ぬが其でも一通り心得て居るがマッ此道では球光を以て始祖と一次に東山天山公引拙宗理宗
 陳紹鷗宗風と來て次が千宗易である此人中興の業を成して其より弘まつたのであるが古は大名
 に此道の上手が有て前田徳善松永彈正古田織部小堀遠江同大膳細川三齋金森宗和杯皆々貴族で
 あつた其より肖栢老人光琳昭乗道三など、て名人も出た事だか何でも是ばかりは大名が豪富で
 なくては數寄を尽す譯にもいかず道具が第一集らぬで本眞の樂みは出來ぬ一体茶と云ふものは
 強ち道具を捨くるが本意でも有まいがマッ是か専らとなりて古いものくでかためだから吾々
 貧生には及ばぬテ底へいつては樂めるものは樂だテ樂と云ては君達には分るめへが樂の沿革を
 話して聞せる迄もない日本の樂と支那の樂と一通りあるが神樂と云ふものは吾國の樂の初めて
 有る此事は白石の遺稿にくばいから今云迄もないが先つ和琴琵琶などが第一であるか己が平
 世樂一む所は箏篋と琵琶である獨樂には此上のなきものぢや今よく月琴やら一絃琴を遊ぶ
 がどうも俗で聞れぬ第一に毛唐人の寢言だから感心せぬテ圍碁は遊藝中では最も樂みあるのみ
 ならず古く傳はりてよい者なれと獨樂が出來ぬから不便じやナニ碁のいわれを聞たいト何も別
 に講釋もないが盤は立て一尺四寸にして横一尺三寸目は七分にて一年三百六十五日を象り碁筒
 は日月に擬して黑白は晝と夜とを見し聖目は九星を表して最も貴重なり圍碁式には九星の事由
 來分明ならずと有て喜多村翁の説では九ツを星目と言ハ誤なり一ツにても星目なり今碁を打を

五十三

の弟子にして永徳ハ元信の三男松榮の子で五座る此の人一派を書き出されて右近探幽など下有
 名な人も出まゝ玉樂もまた此流より出て一派を立られ元龜天正の頃小田原の北條家に仕へて
 天下に聞た人で五座るから全く時代が違ひます全体狩野家には元祖元信以來名人も多ふ御座る
 が永徳が一派を立られた後ち探幽の弟尙信もまた一派を立られ其所で家が三ツに分れた様な者
 じやナニ繪の家と其だけかトどうしてノ第一古いのが土佐家元祖は土佐守經隆次が行光光重
 廣周光信光茂など云ふ外には東福寺の兆典子か書出された明兆派巨勢金岡派仁安の頃の鳥羽流
 明より渡つた秀文天龍寺の玉腕子然可翁雪舟雪村周徳英一蝶などおろくある其派を立た中に
 重立た人々のみにて斯の如く中々數ひ切れた者ではない其はハ、ア許六が筆成程是ハ面白い
 手紙らしいが眞物らしい許六は蕉門の十哲と云て俳諧の方では貴重される人よナニ誰の弟子だ
 ト今も云た通り蕉門の十哲とて芭蕉の門弟中で寶井其角嵐雪支考丈草許六去來野坡北枝杉風越
 人などと十人を十哲と云れた組サ皆な當時の名人である中にも其角は江戸風とて一流を起し杉
 風は正風を弘むるに力を盡した人物である後世此の流義の天下に廣まつたは全く十弟子の方だ
 已は江戸流とて其角の流を酌むが斯道にも入て見と淡林蕉風伊勢美濃などと流義はいろく
 ある其講釋を云初めた日には一朝一夕の事にあらずサ此の幅なども矢張り茶道向きであるど
 りて探幽守信の筆である此人は茶もよくせられて随分達人であつたそうナニ己は茶は餘り
 好ぬが其でも一通り心得て居るがマッ此道では球光を以て始祖と一次に東山天山公引拙宗理宗
 陳紹鷗宗風と來て次が千宗易である此人中興の業を成して其より弘まつたのであるが古は大名
 に此道の上手が有て前田徳善松永彈正古田織部小堀遠江同大膳細川三齋金森宗和杯皆々貴族で
 あつた其より肖栢老人光琳昭乗道三など、て名人も出た事だか何でも是ばかりは大名が豪富で
 なくては數寄を尽す譯にもいかず道具が第一集らぬで本眞の樂みは出來ぬ一体茶と云ふものは
 強ち道具を捨くるが本意でも有まいがマッ是か専らとなりて古いものくでかためだから吾々
 貧生には及ばぬテ底へいつては樂めるものは樂だテ樂と云ては君達には分るめへが樂の沿革を
 話して聞せる迄もない日本の樂と支那の樂と一通りあるが神樂と云ふものは吾國の樂の初めて
 有る此事は白石の遺稿にくばいから今云迄もないが先つ和琴琵琶などが第一であるか己が平
 世樂一む所は箏篋と琵琶である獨樂には此上のなきものぢや今よく月琴やら一絃琴を遊ぶ
 がどうも俗で聞れぬ第一に毛唐人の寢言だから感心せぬテ圍碁は遊藝中では最も樂みあるのみ
 ならず古く傳はりてよい者なれと獨樂が出來ぬから不便じやナニ碁のいわれを聞たいト何も別
 に講釋もないが盤は立て一尺四寸にして横一尺三寸目は七分にて一年三百六十五日を象り碁筒
 は日月に擬して黑白は晝と夜とを見し聖目は九星を表して最も貴重なり圍碁式には九星の事由
 來分明ならずと有て喜多村翁の説では九ツを星目と言ハ誤なり一ツにても星目なり今碁を打を

見るに皆星目をさけて打古法と同一からずとあるが何れが本の誦なるや知れず其の事ハ今昔物語にも源氏花の宴の巻にもあれば古より開けたると見ゆるが已は余り打ぬから悉くも調べぬ事が恐らく世の中に有るまい然し余り百科の技術に達せ過ると世間が馬鹿に見て困るよ先づ遊藝も一通りは學で置たれば何を望まれても屁込む苦勞はない學問も諸子百科に涉て居るが今日でも先づ第一に文章が緊要で有ふテ今の書生が書く文と來たら滅茶くで更に文章の体もなかり飾つて胡魔菓子をやらかすから有る清の歸震川は近代の大家にて能く文章に通じて居たがあの男の文章を讀位に目か利は余程い、日本でハ山陽だの竹堂のと云か日本人の文は何分にも臭氣が有で何分にも秦漢の文法を得ぬ様である何を云ても唐宋の頃だテあの時は已に一變して居るがまたく近代の臭氣文章とは違ふテ今の學者は人物からして屁子くたる人物であるから碌な文の出来る氣支な一サ已が奮て文章改革を主張する日にハ天下靡然として應ずるに疑ひな一だか今商業がいうがしいから其の暇もなし其に實は内職に翻譯をして居るから大部のうがしいテ少く閑を得たら文章改革を唱て漢學の眞面目を表陽てやりたのと思て居るから大部のうがの丸と止ても今の奴等ア皆を酔て居るから解せずサ

吾輩などは世間が馬鹿に見へて

の奴ア昔の人物でなくては承知しねへら可笑いナニ探幽元信知れた者サイヤ言のを忘れたが油繪も望みならば書てやりませす誰う欲しい人があらば周旋して呉れ玉へ石版畫も道具を持て來れば書てもよいは、、、餘り藝が多いと矢張り貧乏だト是はいたり餘り人物が高過るから貧乏するのである己の才を以て世に媚び時に阿り朱門高堂に出入して其意を迎ふる日には捨賣にても縣令がものはあるマツく時の至るを待て草莽に隠れるもよいではないか吾々の如き豪傑が民間に居らぬト何となく朝野の人才平均を失ひ頭大振はずイヤ頭大ではない尾大振はずでハない頭勝の形て國の爲でないテ奇んたト一藝に名ある者は必ず採用せられる時節だから萬藝に名ある者は大に採用せられ可き筈だト是はしたりとも足下は一を知て二を知らぬト言ふもの一藝が出来る位の人物ならば採用しても使役する事が出來やうが己の様に萬藝に通じたる者は上でも使ひきれないのだ

明治二十年十月廿二日 翻刻御届
同 年十一月三十日 刻成

(定價三十錢)

翻刻出版人

京都府平民

上田

捨吉

大坂南區末吉橋通三丁目
十五番地

大坂心齋橋北詰四番地

發兌所

駸々堂本店

京都四條柳馬場東へ入ル

駸々堂支店

神戸多門通二丁目

同 出張店

大坂梅田ステーション内

同 出張店

京都七條ステーション内

同 出張店

神戸ステーション内

同 出張店

大津ステーション内

同 出張店

三ノ宮ステーション内

同 出張店

278
6
844

明信生话

抱腹奇談

晴亭柳窓著



欽定

091873-000-3

特52-554

抱腹奇談

晴亭 柳窓 / 著

M20

DBO-0405

